

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成27年度病虫害発生予報第6号(9月)について

このことについて、病虫害発生予報第6号を発表したので送付します。

予報第6号

9月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

主な病虫害の発生予報概要

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病	多	多	並
	紋枯病	やや少	並	並
	トビイロウンカ	少	少	少
	斑点米カメムシ類	やや多	並	並
大豆	ハスモンヨトウ	少	少	並
	吸実性カメムシ類	少	少	並
カンキツ	黒点病	少	やや少	並
	ミカンハダニ	少	少	少
カキ	炭疽病	少	やや少	並
	フジコナカイガラムシ	多	多	多
果樹共通	チャバネアオカメムシ	少	—	やや多
茶	炭疽病	やや多	やや多	—
	カンザワハダニ	多	並	—
	チャノキイロアザミウマ	並	やや少	—
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや少	—
	チャノコカクモンハマキ	並	並	—
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病	並	やや多	—
	うどんこ病	並	やや多	—
	ハダニ類	やや少	やや少	—

*果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいため前年比としている
*茶・冬春イチゴ(育苗期)は前年9月は未調査のため、予報は平年比のみ

<予想される向こう1か月の天候（平成27年8月29日～平成27年9月28日）>

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年並か低く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年より少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は平年より低く、2週目は平年並か低く、3～4週目は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低40 並40 高20% 平年並か低い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少50 並30 多20% 少ない見込み

（福岡管区气象台 平成27年8月27日発表抜粋）

作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病虫害の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：水稻】

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

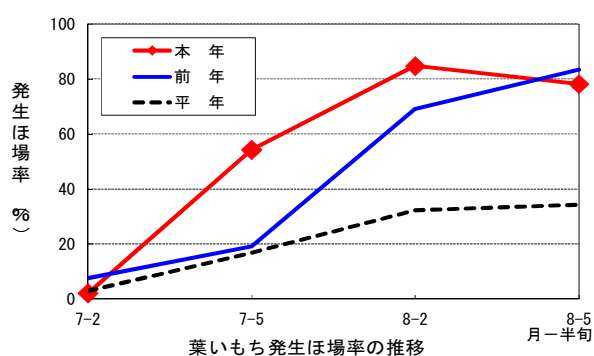
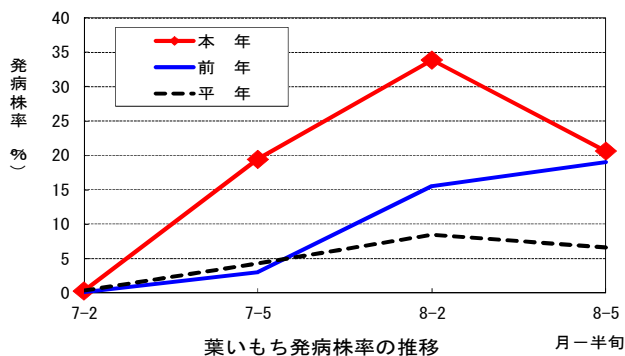
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。

発病株率 20.7%（平年 6.7%、前年 19.0%）

発生ほ場率 78.3%（平年 34.3%、前年 83.3%）

発病株率は、8月2半旬調査時点の6割程度に留まり、発病葉は停滞型病斑が中心である。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉いもちが発生しているほ場では、穂揃期の薬剤防除を徹底する。

イ 本年はいもち病の常発地だけでなく、平坦地でも発生が見られるため、発生状況を必ず確認し、今後の発生状況に十分注意する。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので使用基準を確認する。

エ 使用農薬は「平成27年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。

オ 農薬の使用および散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病虫害についても同様）。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病株率 3.8%（平年6.1%、前年2.8%）

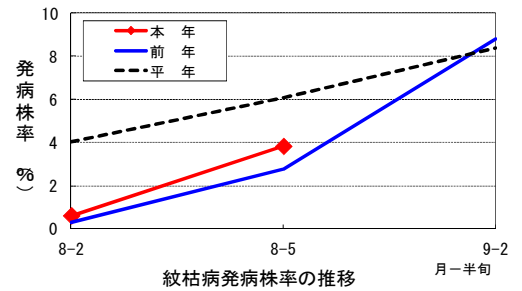
発生ほ場率 31.1%（平年34.5%、前年27.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降も、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。

イ 農薬によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。



3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

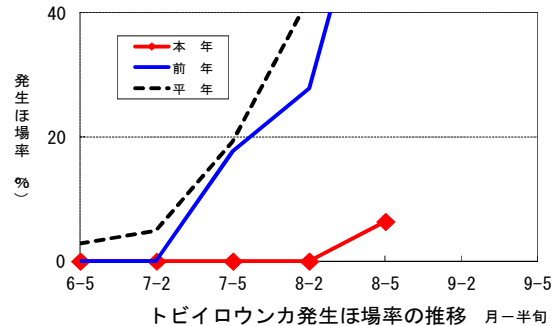
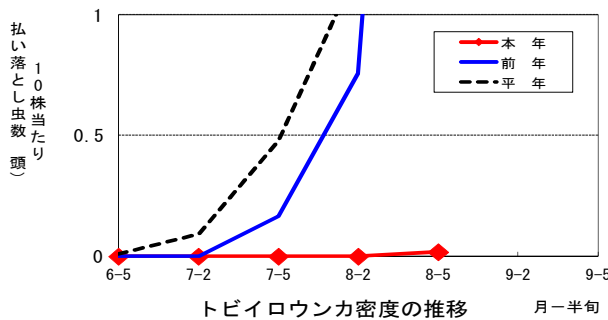
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

10株当たり払い落とし成幼虫数 0.02頭（平年5.7頭、前年5.1頭）

発生ほ場率 6.4%（平年50.4%、前年72.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種は発生初期には低密度でも世代を経るごとに急激に増加するので、ほ場での発生状況を確認する。

発生密度が要防除水準を超えたほ場では防除を実施する。

<要防除水準>

飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上

飛来後第3世代：100株当たり 1,000頭以上

イ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう注意して散布する。

ウ 薬剤散布に際しては収穫前日数に注意する。

4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査（水田内の片振り20回すくい取り）の結果、発生量は主要3種カメムシ・アカスジカスミカメは平年よりやや多く、ミナミアオカメムシは平年並であった（±～+）。

- ・主要3種カメムシ（クモリカメムシ、ホリカメムシ、シロホカメムシ）

20回すくい取り虫数 1.3頭（平年0.9頭、前年0頭）

発生ほ場率 50.0%（平年23.0%、前年0%）

- ・ミナミアオカメムシ

20回すくい取り虫数 0頭（平年0.1頭、前年0頭）

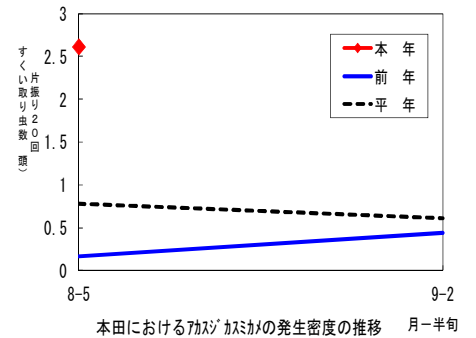
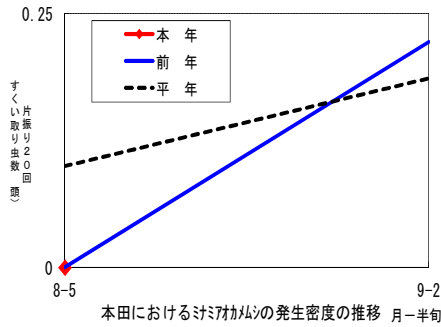
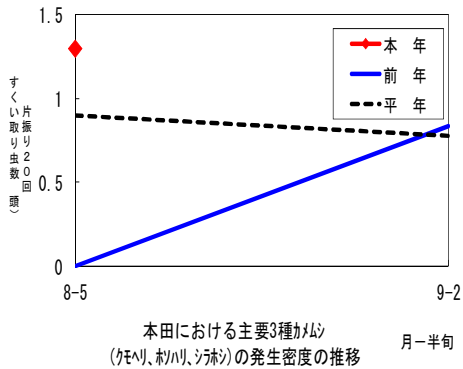
発生ほ場率 0%（平年3.8%、前年0%）

- ・アカスジカスミカメ
20回すくい取り虫数 2.6頭（平年0.8頭、前年0.2頭）
発生ほ場率 46.2%（平年20.9%、前年16.7%）

イ 県下5か所の予察灯における8月1半旬～4半旬の誘殺虫数は、ミナミアオカメムシ・アカスジカスミカメは平年より多かったが、主要3種カメムシは平年よりやや少なかった（±～+）。

- ・主要3種カメムシ(クモハリカメムシ、ホハリカメムシ、シロホカメムシ)
16頭（平年28頭、前年16頭）
- ・ミナミアオカメムシ
47頭（平年32頭、前年20頭）
- ・アカスジカスミカメ
827頭（平年480頭、前年98頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除時期は穂揃い7～10日後である。
- イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。
- ウ 防除が実施されたほ場においても、カメムシ類の再飛来には十分注意する。

【普通作物：大豆】

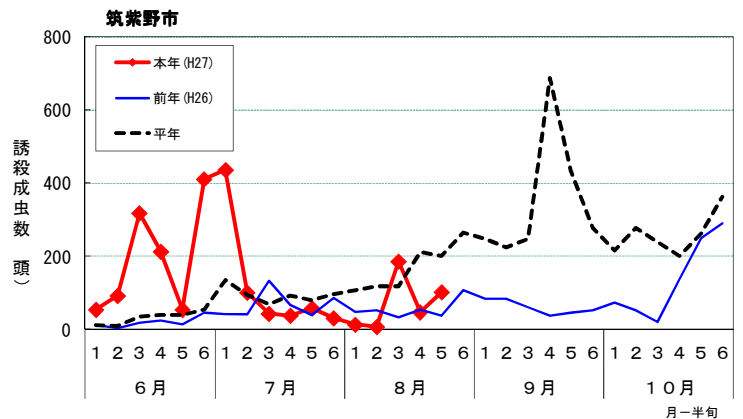
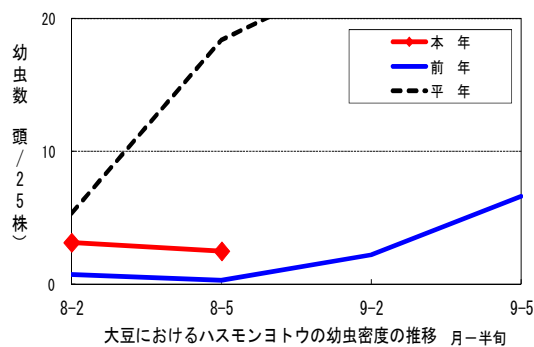
1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

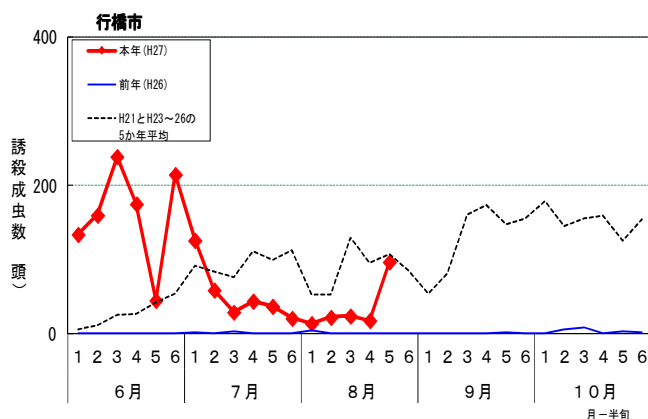
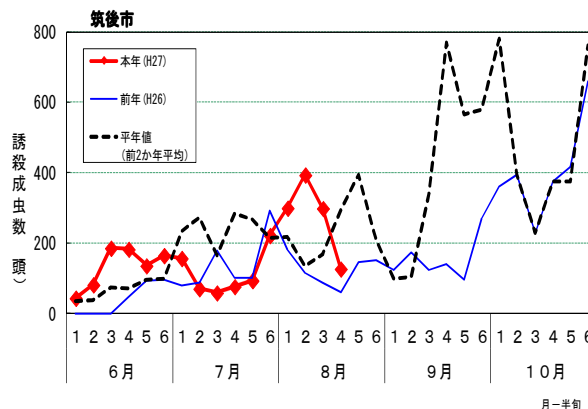
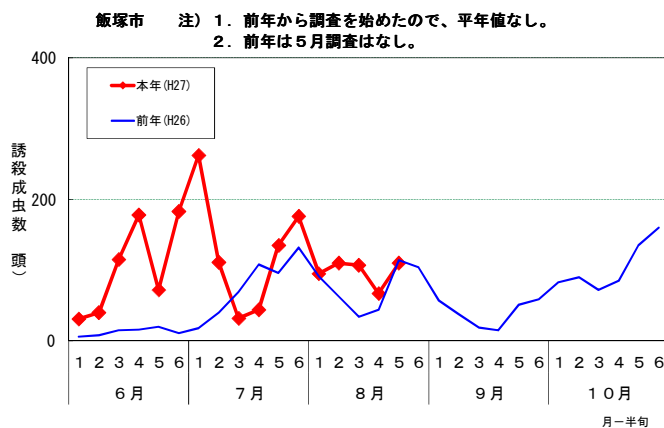
発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。
25株当たり幼虫数 2.5頭（平年18.4頭、前年0.3頭）
発生ほ場率 30.0%（平年61.4%、前年15.4%）
- イ フェロモントラップにおける8月1半旬～5半旬の誘殺虫数は平年より少なかった（-）。
筑紫野市 355頭（平年752頭、前年223頭）
- ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(参考) 下記地区は調査年数が2か年・5か年のため参考とする。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 分散前の若齢幼虫が群生している白変葉は、見つけ次第除去する。
- イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ 防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認する。

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

主要3種カメムシ (アオカメムシ、イモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ)

25株当たり虫数 0頭 (平年0.2頭、前年0頭)

発生ほ場率 0% (平年9.3%、前年0%)

ミナミアオカメムシ

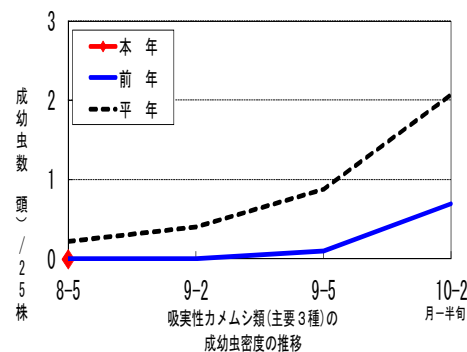
25株当たり虫数 0頭 (平年0.04頭、前年0頭)

発生ほ場率 0% (平年1.7%、前年0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている(一)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期は開花期後30日前後である。多発生の場合は7～10日後にも防除を行う。
- イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。



【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

発病果率 0.6% (平年 3.4%、前年 0.3%)

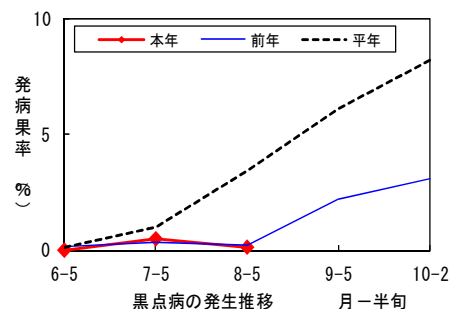
発生ほ場率 27.2% (平年 45.6%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 13の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

寄生葉率 4.8% (平年 15.6%、前年 0.1%)

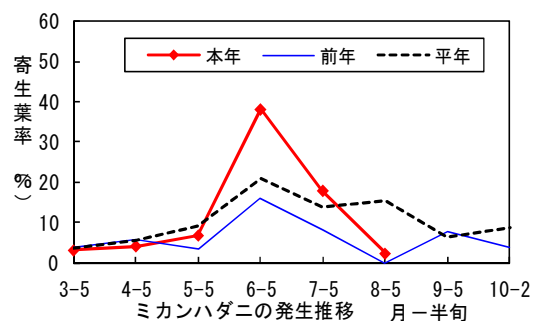
発生ほ場率 45.5% (平年 67.1%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(一~±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

発病枝率 0% (平年 0.1%、前年 0%)

発生ほ場率 0% (平年 5.3%、前年 0%)

発病果率 0% (平年 0.2%、前年 0.1%)

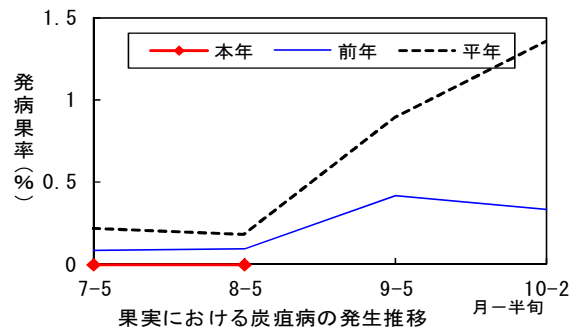
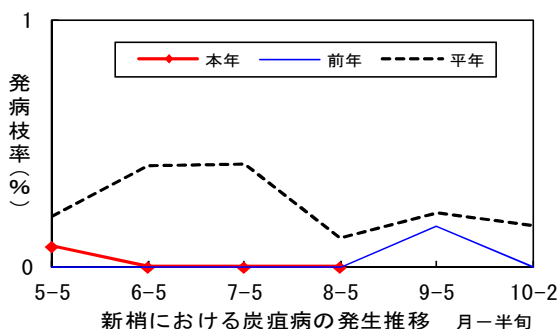
発生ほ場率 0% (平年 15.4%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 連続降雨や前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

8月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生果率 19.7 % (平年 10.3%、前年 14.5%)

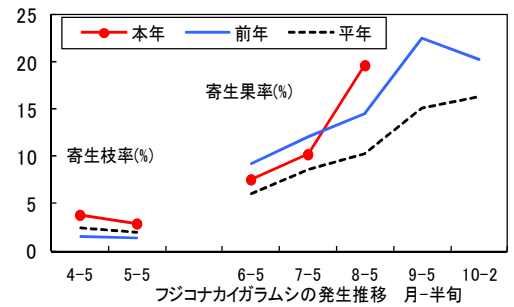
発生ほ場率 100 % (平年 87.0%、前年 91.7%)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので混み合った枝を整理し、散布むらがないよう丁寧に散布する。

イ 防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病害虫・雑草防除の手引き』を参考にしてください。

URL : http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/137505_50502708_misc.pdf



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多、前々年より少

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は平均0.9頭（前年4.8頭、前々年0.7頭）で、前年より少なかった（-）。

チャバネアオカメムシの越冬量およびヒノキ球果着生量の年次推移

	平成27年	平成26年	平成25年
越冬量(頭/㎡)	0.9	4.8	0.7
ヒノキ球果着生量	やや少	中	中

イ 8月1半月～4半月までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシの誘殺数は、前年より少なかった（-）。

誘殺数：4頭（前年6,788頭、前々年 0頭）（調査地点：筑紫野市）

ウ 8月1半月～4半月までの予察灯でのチャバネアオカメムシの誘殺数は、前年より少なかった（-）。

誘殺数：321頭（前年 1,298頭、前々年791頭）（調査地点：久留米市）

122頭（前年 2,177頭、前々年745頭）（調査地点：八女市）

エ 8月5半月におけるヒノキ球果の口針鞘数は、平均16.1本/球果（前年24.9本/球果、前々年9.7本/球果）で、前年より少なく前々年より多かった。また口針鞘数は0.5～40.4本/球果と地域によりバラツキがあり、多い地点ではチャバネアオカメムシがヒノキから離脱する目安とされる25本を超えすでに離脱を始めていると思われる（±）。

オ 口針鞘が認められたヒノキ球果の割合は、87.7%（前年99.7%、前々年80.9%）と前年より少なく前々年より多かった。また、ヒノキから離脱する目安となる口針鞘数25本/球果に達していない地域が9カ所ある。このため、これらの地域では今後、ヒノキ樹上での成虫の増加が見込まれる（+）。

カ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

平成27年9月1日27農林試第2487号技術情報第10号参照。

表 ヒノキ球果の口針数及びヒノキ球果ピーティングによるカメムシ類捕獲虫数

調査時期：2015年 8月5半旬

調査場所	口針数調査		ピーティング調査(頭)															3種の合計	
	被害球果率(%)	口針数(本)	チャバネアオカメムシ							ツヤアオカメムシ			クサギカメムシ						
			成虫数	幼虫数					計	幼虫比(%)	成虫数	幼虫数	計	成虫数	幼虫数	計			
1令	2令	3令	4令	5令	計	計	成虫数	幼虫数	計	成虫数	幼虫数	計	成虫数	幼虫数	計				
福岡・飯塚	糸島市高祖	100	35.6	2	0	2	2	1	0	5	7	71	0	1	1	0	0	0	8
	宗像市王丸	55	3.4	0	0	0	0	0	0	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0
	飯塚市入水	30	0.5	1	0	0	1	0	0	1	2	50	0	0	0	0	0	0	2
	平均(3か所)	61.7	13.1	1.0	0.0	0.7	1.0	0.3	0.0	2.0	3.0	60.7	0	0.3	0.3	0	0	0	3.3
久留米	久留米市田主丸町森部	100	29.1	4	1	0	0	1	2	4	8	50	1	1	2	0	0	0	10
	うきは市吉井町福益	100	40.4	0	2	6	11	8	11	38	38	100	2	3	5	0	0	0	43
	うきは市吉井町屋部	100	18.7	4	3	1	1	1	1	7	11	64	1	0	1	0	0	0	12
	平均(3か所)	85	4.2	0	0	0	2	0	0	2	2	100	2	0	2	1	1	2	6
朝倉	朝倉市志波	100	10.8	3	1	0	1	2	1	5	8	63	1	14	15	0	0	0	23
	朝倉市宮野	100	9.5	0	0	7	0	0	3	10	10	100	1	8	9	0	0	0	19
	平均(3か所)	97.5	18.8	1.8	1.2	2.3	2.5	2.0	3.0	11.0	12.8	79.4	1.3	4.3	5.7	0.2	0.2	0.3	18.8
	八女市黒木町本分	100	20.4	5	0	0	0	0	1	1	6	17	2	1	3	0	0	0	9
八女	八女市立花町飛形山	100	30.2	3	0	0	3	0	1	4	7	57	0	1	1	0	0	0	8
	みやま市山川町立山	100	3.0	1	0	0	0	0	1	1	2	50	0	0	0	0	0	0	2
	平均(3か所)	100	17.8	3.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1.0	2.0	5.0	41.3	0.7	0.7	1.3	0	0	0	6.3
	京築	みやこ町犀川木山	70	3.4	3	0	1	0	1	1	3	6	50	0	0	0	0	0	0
平均(13か所)	京築地区	70.0	3.4	3	0	1	0	1	1	3	6	50.0	0	0	0	0	0	0	6.0
	平均(13か所)	87.7	16.1	2.0	0.5	1.3	1.6	1.1	1.7	6.2	8.2	64.3	0.8	2.2	3.0	0.1	0.1	0.2	11.4
	H26	99.7	24.9	2.8	0	0.2	0.1	0.6	1.8	2.7	5.5	46.4	1.1	0.5	1.6	0	0	0	7.1
	H25	80.9	9.7	3.2	0.2	0.7	1.1	0.6	0.9	3.6	6.8	60.1	0.7	0.4	1.1	0.3	0.1	0.4	8.3
H24	97.5	21.1	3.4	0.1	0.2	0.3	0.3	0.3	1.1	4.6	33.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	4.7	

注1) 口針数は20球果を調査し、1球果当たりの平均を記載。
 注2) ピーティング調査は、1地点5枝、1枝当たり5回のたたき落としの結果。
 注3) チャバネアオカメムシの卵から次世代の成虫になるまでの期間は、夏期の気温で約30~40日。
 注4) H25は、チャバネアオカメムシの越冬量がH27と同程度の類似年。
 注5) 新世代の果樹園への飛来予測時期は、堤らの予測式により算出した口針数が25本に達する時期。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき うどんこ病	多	多	並	・防除にあたっては、薬液が葉裏にかかるように丁寧に散布する。 ・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、薬液を高圧で十分かかるように散布する。
ハマキムシ類	並	並	やや多	

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

発病葉数 3.0葉(平年1.5葉、前年0.7葉)

発生ほ場率 55.6%(平年33.0%、前年55.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

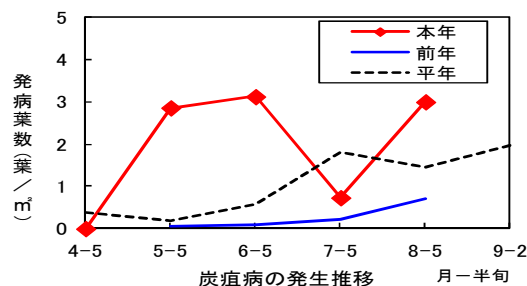
(3) 防除上注意すべき事項

ア 本年は炭疽病の発生が多く、感染の拡大が予想されるので、9月上~中旬の防除の際、害虫と併せて病害の防除も行うように努める。

イ 秋芽での発生に注意し、防除を行う。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



※ 前年の4-5,9-2は未調査。他のグラフも同様。

2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生葉率 9.0% (平年 3.7%、前年 0.2%)

50葉当たり虫数 10.8頭 (平年 10.6頭、前年 0.9頭)

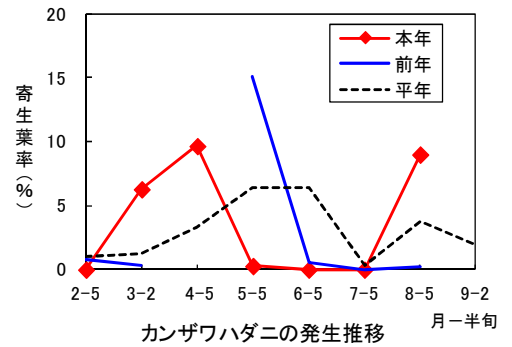
発生ほ場率 60.0% (平年 34.2%、前年 11.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(〜±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

たたき落とし虫数 2.3頭 (平年 3.9頭、前年 0.8頭)

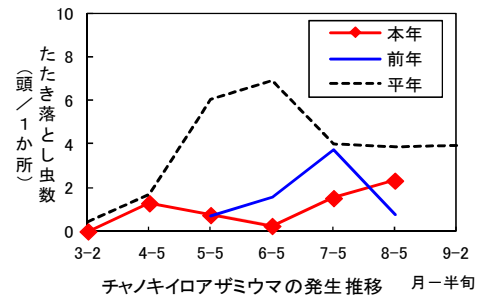
発生ほ場率 80.0% (平年 83.5%、前年 55.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(〜±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア たたき落とし(B5版上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



4 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

たたき落とし虫数 0.2頭 (平年 0.7頭、前年 0.4頭)

発生ほ場率 60.0% (平年 53.7%、前年 44.4%)

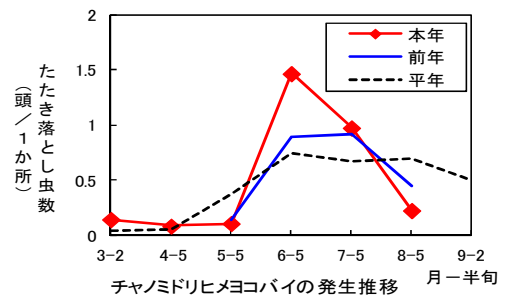
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(〜±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア たたき落とし(B5版上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 多発後は防除効果が劣るので、多発する前に防除を行う。



5 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害葉数 0.3葉 (平年 1.2葉、前年 0葉)

発生ほ場率 40.0% (平年 20.1%、前年 0%)

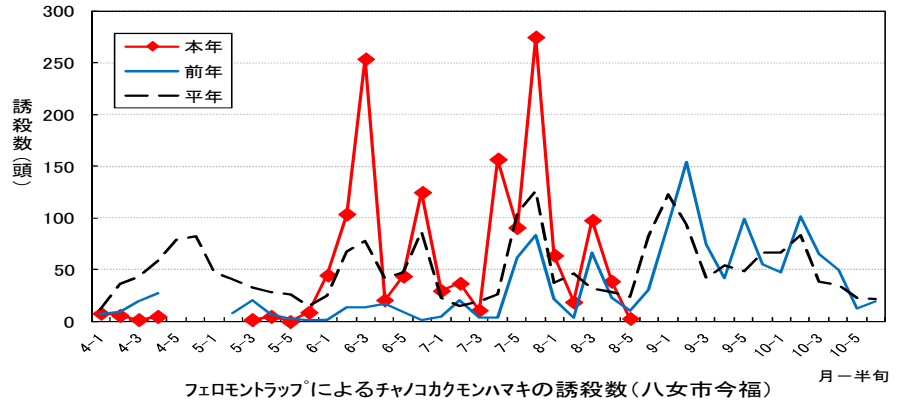
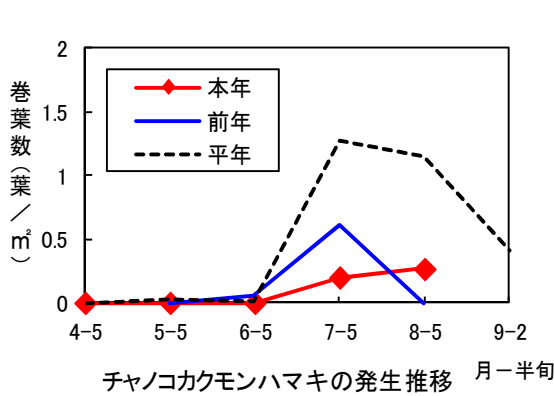
※新芽(秋芽)の被害は平年並だが、硬化葉に非常に食害が目立つ園もあった。秋芽に食害を受けないよう、防除は必要。

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(〜±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は、9月上〜中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 卷葉後は防除効果が劣るため、卷葉が見られたら直ちに防除を行う。



【茶：その他の病害虫】

病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
もち病	並	並	—	・秋芽生育期に降雨が多いと、感染、発病しやすくなる。 ・今年多発した園では、萌芽から1葉期までに防除を行う。
チャノホソガ	並	並	—	・ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・卷葉後は防除効果が劣るため、卷葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャトゲコナジラミ	少	少	—	・防除適期は若齢幼虫期で、第3世代幼虫の防除適期は、9月中～下旬と予想される。 ・虫の発生が確認できない園でも、寄生している可能性が高いので防除を行う。 ・幼虫は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏に十分にかかるよう丁寧に散布する。

※ チャトゲコナジラミは、平成24、25年9月の発生量の平均を平年値としている。

【野菜：冬春イチゴ(育苗期)】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 0.16% (平年 0.14%、前年 0.18%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 台風による風雨の影響を受けたことから今後の発生量の増加が懸念される。

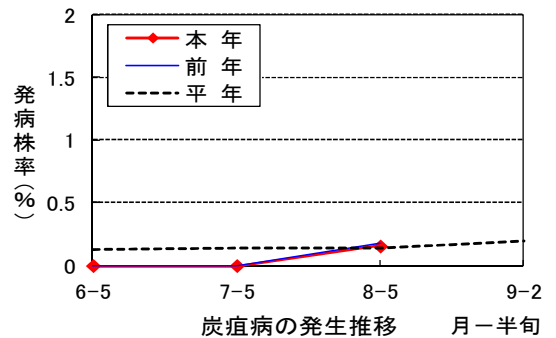
罹病苗とその周辺苗は早めに処分し、定期的に薬剤防除を実行する。

イ ビニル及び寒冷紗被覆をしている育苗ほ場では風通しを良くする。

ウ 低温暗黒処理や夜冷短日処理を行う場合は、必ず健全苗を用いる。

エ 苗の選別には注意し、感染の可能性がある生育不良株は定植しない。

オ 定植後の発病株は周囲の土ごと掘り取り、残渣を残さないようにして、ほ場外へ持ち出し処分



※ 前年の9-2は未調査。他のグラフも同様。

する。

カ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 0.14% (平年 0%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

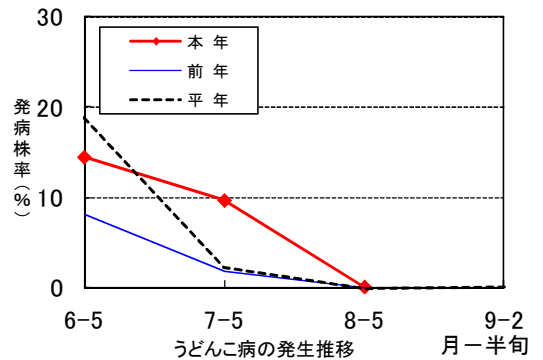
ア 苗の間隔を空け通風を図る。

イ 発病葉の早期発見に努め、見つけ次第速やかに除去する。

ウ 低温暗黒処理や夜冷短日処理を行う場合は、入庫前に薬剤防除を徹底し、本ぼに持ち込まないようにする。

エ 薬剤防除は下葉かぎ後に行うと効果的である。

また、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。

寄生株率 8.4% (平年 14.2%、前年 1.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(-~±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

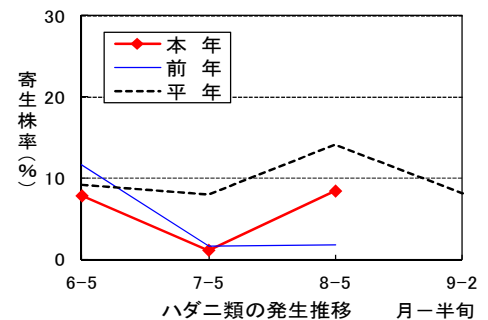
イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れて密封し、処分する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ 低温暗黒処理や夜冷短日処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、本ぼにハダニを持ち込まないようにする。

オ 抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。また、葉裏に農薬が付着するよう、下葉かぎ後に防除を行う。

カ 本ぼで天敵を利用する場合は、育苗期後半は天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。

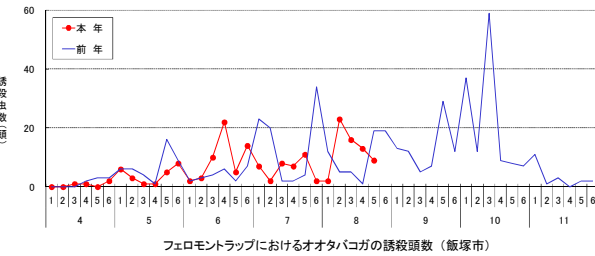
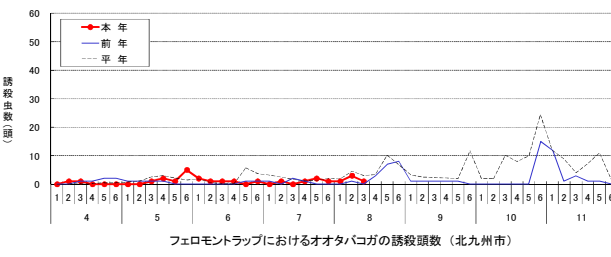
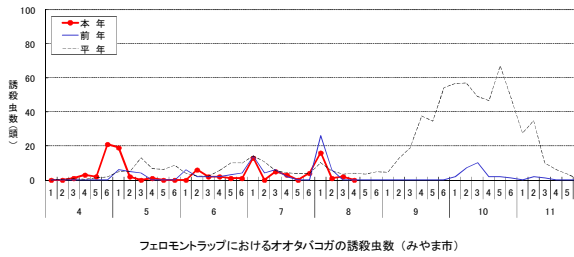
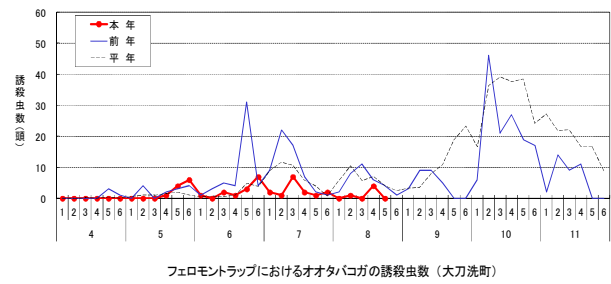
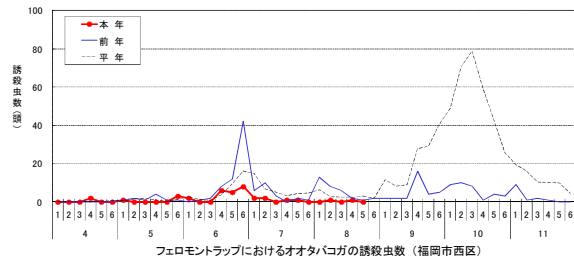


【野菜：その他の病害虫】

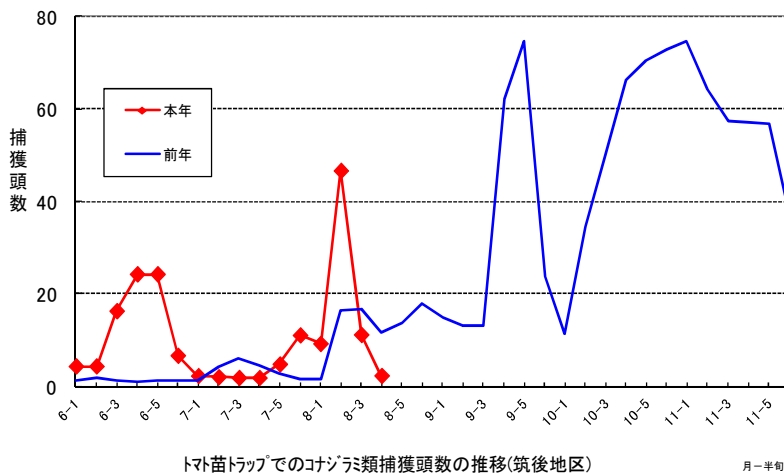
作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通 ハスモンヨトウ	少	やや少	並	<ul style="list-style-type: none"> 若齢幼虫は群生しているため、かすり状の葉を見つけ次第、除去・処分する。 施設内への成虫の飛び込み防止のため、防虫ネットを隙間なく張る（以下の病害虫についても同様）。

オオタバコガ	少	やや少	やや少	<ul style="list-style-type: none"> 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと（以下の病害虫についても同様）。 薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。 早期発見に努め、初期発生からの薬剤防除を徹底する。 施設内への成虫の飛び込みを防止するため防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。
コナジラミ類	少 (※)	— (※)	やや少	

※ 現調査地点での調査は前年から実施しているので、現況は前年比、予報の平年比はなし。



注) オオタバコガの誘殺虫数は地域差が大きいため、縦軸の値はグラフによって異なる。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しました。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



福岡県病害虫防除所